

今年も1月、お正月の2日間、箱根駅伝が行われた。テレビを見ていると、知り合いの方が登場した。一気に記憶が蘇った。

以前、私が金山町の横田小学校に勤務していたときに、体育アドバイザーとして高橋賢人さんという方に来ていただいたことがある。高橋さんと話していたところ、何と箱根駅伝を走ったことがあるというではないか。そこから私の質問攻めが始まった。

後で聞いた話だが、高橋さんは私のことを校長とは思わずに話していたそうである。道理でいろいろなことを話してくれたわけだ。相手が校長となれば、もう少し遠慮させてしまったかもしれない。見た目、校長には見えないことがプラスに出た。

その箱根ランナーである高橋賢人さんがテレビに出てきたのだからびっくりである。どうやら、高橋さんは、青年海外協力隊員として2年間、キルギス共和国に行っていたことがわかった。そういえば、何年か前に郡山で偶然、高橋さんにお会いしたことがあった。そのとき、これから海外に行くという話をしていた。

高橋さんには、体育アドバイザーとは別に、講演会の講師もお願いした。金山中学校で中学生と小学5・6年生を前に、ご自分の体験をもとに話をしていただいた。このときの話聞いていた中学生の中には、この春に大学進学が決まり、テレビで高橋さんのことを知り、自分から連絡を取って高橋さんに会いに行った若者もいる。その若者の中には、ずっと高橋さんの話が残っていたのである。

高橋さんは、キルギスでマラソンのオリンピック選手を育成していた。言葉の問題だけでなく、様々な問題が彼を襲ったはずである。一番は選手の意識改革だったとの話をしていた。彼はなぜくじけないのか。なぜ努力をすることができるのか。それは箱根を走っているからである。大学の代表として箱根を走るメンバーになるまでに、想像を絶する苦労や努力をしてきている。度重なる困難が彼を苦しめたはずである。だが、彼は負けなかった。そして箱根を走った。

テレビを見ながら高橋さんとのことを思い出していると、創価大学がトップに立ったまま、最終10区となった。後ろからは、大八木監督の「男だろ」の檄に励まされながら駒澤大学が追いついてきている。追いつくのは難しい距離だと誰もが思ったはずである。だが、勝負は最後までわからない。あきらめないことが大切である。よく言われることだが、それは本当だった。駒澤大学が先頭でゴールテープを切ったのである。

大八木監督も高橋さんも福島県の人である。箱根駅伝では、他にも東洋大学の酒井監督など、福島県出身の指導者や選手を数多く見ることができる。大八木監督にとって、駒澤大学にとって、久しぶりの優勝となった。

ここ数年、大八木監督は大変な苦労をしてきたはずである。それでも、大八木監督を慕い、信頼し、ついていった選手たちがいたからこそ、今回の大逆転劇が生まれたわけである。選手たちは、大八木監督から「男だろ」と言われると、スイッチが入るそうである。これぞ互いの信頼関係の表れであろう。最終10区で先頭に立った石川選手は、大八木監督から「男だろ」ではなく「お前、男だ」と声をかけてもらっている。最高のほめ言葉である。

私個人としては、東洋大学の酒井監督のスタイルも好きだが、駒澤大学の八木監督の「男だろ」も好きである。数多い指導者の中で一人くらい選手に向かって「男だろ」と叫んでいる監督がいてもいいのではないか。指導者の個性が魅力となり、学生を選手として成長させていくのだろう。これからも箱根駅伝は楽しみである。また、高橋賢人さんの今後の活躍も楽しみである。